



ジャクソンのシネマハウスで会いましょう！

前橋市国際交流員 ジャクソン・バニスターの活動報告

令和8年7月

前橋市のミニシアター「前橋シネマハウス」。映画好きの国際交流員ジャクソンが、支配人おすすめの一本を観て、レビューをお届けします。映画は国境を超える！
皆さん、映画館でお会いしましょう！



7月の映画

『サンキュー、チャック』

2024年 アメリカ

Jackson Bannister

群馬県前橋市の国際交流員 (CIR)として、日本人と外国人との文化的理解を深めるために活動しています。



映画はもう一人の家族

～前橋の街で新たな映画の発見を。地域とつながりを持った映画館を目指します～



映画を通じて家族のようなつながりを地域の皆さんと作っていききたいという思いから“前橋シネマハウス”をオープンすることになりました。小さな映画館ではありますが、前橋の街なかから様々な映画を発信しています。上映が少ないミニシアター系の良作からシネコンで上映が終了したヒット作、お子様と一緒にファミリーで楽しめる作品、過去の名画など様々なジャンルから作品をセレクトし新しい映画を発見してもらえる。そんな“シネマハウス”をつくっていききたいと思います。

MISSION ————— 前橋千代田町五丁目1-16前橋プラザ元気21別館3階

サンキュー、 チャック

誰もが、ひとつの宇宙
を抱えて生きている。

今回の映画レビューでは、現在前橋シネマハウスで上映中の『サンキュー、チャック』を紹介します！

同名のスティーヴン・キングの中編小説を原作に、マイク・フラナガンが監督を務めた『サンキュー、チャック』は、「死」「記憶」、そして「生きること」の意味を静かに問いかける、2024年公開のファンタジー要素を含んだヒューマンドラマだ。死を題材にしながらも、その本質は人生への賛歌であり、ごく普通に見える一人一人の人間の中にも、無数の経験から成る一つの‘宇宙’が広がっているということを描いている。

物語は時系列を逆行する三部構成で展開し、主人公チャールズ・クラutz（チャック）の人生を少しずつ紐解いていく。チャックを演じるのはトム・ヒドルストン。一見すると、平凡な会計士として静かな日常を送る、ありふれた人物に過ぎない。しかし、物語が彼の過去へと遡るにつれ、『サンキュー、チャック』が描こうとしているのは彼一人の人生ではなく、「一見何の変哲もないように思える人間の人生にも計り知れない価値がある」ということだと分かってくる。

作品の根底にあるテーマは、ウォルト・ホイットマンの『Song of Myself（私自身の歌）』に登場する有名な一節、「私は広大であり、無数のものを内包している（I am large, I contain multitudes.）」に集約されている。私たちは人生の中で出会う人々、訪れた場所、耳にした音楽、そして喜びや苦しみといったあらゆる経験を積み重ねながら、自分という存在を形作っていく。

誰もが心の中に一つの世界を抱えて生きているのだ。物語を逆順に描くことで、本作はチャックの「内なる無数の世界」を少しずつ浮かび上がらせ、その豊かな人生を知った上で、その始まりへと私たちを導いていく。

技術的な面では、フラナガンがホラー作品で培ってきた手腕が冒頭から存分に発揮されている。『ウィジャ ビギニング ～呪い襲い殺す～』や『ザ・ホーンティング・オブ・ヒルハウス』などで知られる彼らしく、抑制されたカメラワーク、不穏な音響演出、そして理由の分からない不安感によって、第1幕はまるで別作品のような緊張感に包まれている。

もっとも、このように醸し出された大胆な雰囲気は、原作がスティーヴン・キング作品であることを思えば非常に納得できる。そのじわじわと迫る恐怖は、単に観客を怖がらせるためのものではない。一人の人間が築き上げた世界がいかに脆く、

儚いものなのかを実感させることで、チャックの何気ない日常の一瞬一瞬が、より切なく、そしてかけがえのないものとして胸に迫ってくる。

本作が真価を発揮するのは、第2幕と第3幕だ。チャックの人生が少しずつ明かされるにつれ、それまで見えていた景色が大きく変わっていく。本作は、一人の人生の重みや、その人だけが持つ世界の尊さについて静かに問いかけてくる。

脚本も終始引き込まれる出来栄だった。哲学的な対話が多く盛り込まれているが、必要以上に自己陶酔的になることはなく、「どんなに平凡な人生にも計り知れない複雑さがある」という作品のテーマへと自然に収束していく。時には映画というより文学作品を読んでいるような感覚すらあり、アーロン・ソーキンやアンディ・ウィアーの作品を思わせる知的な会話劇が印象的だった
とはいえ、それはフラナガンへの批判ではまったくない。むしろ、ホラー監督として知られる彼が、

本作では脚本・監督の両面で高い表現力を見せたことを証明していると言えるだろう。

総じて、『サンキュー、チャック』は良い意味で期待を大きく裏切る作品だった。トム・ヒドルストンをはじめ、キウエテル・イジョフォーやマーク・ハミルといった豪華な俳優陣が出演しているにもかかわらず、これまで見逃していたことが惜しまれる一本である。ミステリー、哀愁、ユーモア、ファンタジー、そしてヒューマンドラマへと自在に表情を変えていくが、そのどれもがちぐはぐに感じられることはない。すべてが「人は誰しも無数の世界を内に抱えている」という作品のテーマへとつながっているからだ。『サンキュー、チャック』は、一見平凡に見える誰もが、かけがえのない記憶や人間関係、経験の積み重ねによって成り立つ唯一無二の世界を抱えていることを教えてくれる。そして、誰かの人生には、その人にしか見ることのできない世界が確かに存在するのだと、静かに実感させてくれる作品である。